

～ 肝炎ウイルスについて ～

肝炎とは、肝細胞に炎症が起こり、肝細胞が破壊される病態です。原因にはウイルス、アルコール、薬物、自己免疫等があります。

ウイルス性肝炎とはA、B、C、D、E型5種類の肝炎ウイルスが感染することで起こる肝臓の病態です。日本においてはB型肝炎ウイルスあるいはC型肝炎ウイルスの感染による肝炎がその多くを占めており、肝硬変や肝癌といった重たい肝臓疾病を引き起こす原因ともなります。

B型肝炎

B型肝炎はB型肝炎ウイルスに感染している人の血液や体液を介して感染することで起こる病気です。感染経路には出産時にて母親から子への感染や性的接触、輸血、臓器移植、刺青等があります。感染後、約6ヶ月でHBs抗体が出現することで、終生免疫を獲得し肝炎は治癒します。また、感染はしているが、症状がない状態をキャリアと言います。日本人ではほとんどが母子間の感染で、母親がHBe抗原陽性の場合には高率にキャリア化します。

C型肝炎

C型肝炎ウイルスは性的接触、輸血、臓器移植、刺青等により感染します。このC型肝炎では、多くの場合は程度の差はありますが肝臓に急性の炎症が起こります。感染者の2割では急性肝炎の段階で治癒していきま。この場合は癌の危険性はありませんが、感染者の約7～8割は慢性化し、慢性肝炎、肝硬変へと進行していきます。C型肝炎の場合、感染してから30年以上経過してから発がんすることが多く見られます。



倦怠感



食欲不振



吐き気



黄疸

ウイルス性肝炎の代表的な検査

HBs抗原・抗体

HBs抗原・抗体は、B型肝炎ウイルス(HBV)に現在感染しているか過去に感染したことがあるのか判断の指標となります。

HCV抗体

C型肝炎ウイルス(HCV)に感染しているかの検査であり、感染後1~2ヶ月で陽性となります。また回復後も体内に残る抗体となります。

